ともその反対のことが起こりうるかもしれない。

そのような中で、現時点でアメリカの保育に関する大規模な経年的研究として注目されるパネル・コーホート・スタディ・プロジェクトのひとつが、National Institute of Child Health and Human Development(=NICHD、全国子ども保健・発達研究所)による、早期保育と青年発達に関する研究 Study of Early Child Care and Youth Development (=SECCY, 1991～) である。このプロジェクトに携わる研究者集団の名称が早期保育リサーチネットワーク Early Child Care Research Network である。

この研究プロジェクトは、日本での長時間保育が子どもに与える影響について注目し、夜間保育所の入所児を対象として追跡研究を行っている安梅の研究にも影響を与えている(安梅、2005)。安梅の研究はその規模と方法の緻密さにおいてわが国の保育分野の研究として傑出したものである。

今後女性の労働力化のみならず、産業構造の変化に伴って人々の就労形態はますます多様化することが予想される。年齢的に子育て時期にある人々は労働力としてもまた多くを期待される年代層でもあり、子育てと就業の両立は男女共同参画社会にあって女性、男性を問わず大きな困難であり、この困難の解決は社会的な課題であるといってもよいであろう。

保育サービスの利用は必然であるとしても、果たして子どもにとって否定的な影響はないのだろうか。それらは現在子育て中の当事者を含め、子どもをもつかもたないかという選択にも大きな影響を与えかねない根本的な疑問である。

保育サービスという「親の代わり」であることが問題となるのか、保育者の資質や能力、子どもに対しての保育者の言動、保育室内外の環境や遊具・教材の整備状況などの機能的な観点、あるいは保育者の給料、保育者と子どもの比率という構造的な観点からの「保育の質」が問題となるのか、それとも同じ保育でも短時間ならよいが長時間ならよくないのかという「保育の量」が問題となるのか。あるいは、それもこれも子どもや親の「個性」「家庭環境」によるのか。これらの疑問に答える研究のデザインは至難の業である。だができうる限りこれらの疑問に答えていくのが研究の社会的役割であるといってよいだろう。

本稿では NICHD の SECCY 研究プロジェクトの基本的な理念構成と方法論、これまでの成果を示し、日本の保育研究あるいは保育サービス提供のあり方に対しての示唆という観点からその意義を明らかにすることを目的としている。

2．アメリカにおける保育に関する経年的研究の流れと NICHID・SECCY プロジェクトの位置づけ

アメリカの保育の歴史をたどると、キンダーガーデンというフローベリズムにもとづく教育的かかわりを中心としたものと (Beatty、1995)、移民のセツルメント・ハウスでの両親の就労を助けるチャイルドケアの提供という二つの大きな源流がある。この二つの大きな源流は、教育なのかケアであるのか、教育政策なのか社会政策なのか、私費か公費かと

いう「保育」の目的や対象、費用負担のいくつかの対立軸のもとに展開・発展し、現在のアメリカの保育の多様性を生み出すに至った。

ところでアメリカにおいて乳幼児発達に対する関心の高まりが最初に喚起されたのは、1920 年代のフロイド（Freud、1926）、およびゲゼル（Gesell、1929）の研究による。この関心の高まりはアメリカに 1920 年代のナーサリー・スクール（保育学校）のブームを生んだ。だが、これらは主として当時の中産階級以上の家庭での、子どもに対する教育の熱意の発現であり、そのまま「保育」に対する政策的・研究的な関心につながるものではなかった（Condry 1983）。

1960 年代、それまでの伝統的な知能観、すなわち知能とは遺伝的なものであり固定したものであるという考え方は検証を得ず、反応的なものであり従来考えられていた以上に環境の影響を受けるものであるという理論が優勢になった（Hunt　1961）。さらに知能発達についての長期的な研究が早期発達の重要性を強調した（Jones 1954、Blooms 1964）。他方、1950 年代と 1960 年代には社会階層の比較研究が拡大し、社会経済的位置の相違が子どもの認知的発達に影響を与えることが示された。そのことは心理学者、幼児教育者、ソーシャルワーカーを、低所得家庭の子どもに対する就学前プログラムの実行に駆り立てたのである。こうして生まれた実験的保育プログラムは参加した子どもの認知的・社会的発達に貢献し、後の学校生活の適応に役立っていた（Condry 1983）。

以上のような知能観の変化、低所得家庭の子どもの実験的保育プログラムの成果は、社会・政治情勢の変化と連動し、「貧困戦争」の一環として 1965 年のヘッドスタート・プロジェクトの開始をもたらした。低所得家庭の就学前の子どもに教育的プログラムを提供することで認知的発達を促し、学校生活をスムーズに開始させることで長期的には貧困からの脱却を目指そうとしたのである。

ヘッドスタート・プロジェクトには当初から評価が必要であるという認識があり、プロジェクトが実施されると必ずプログラム評価が行われた（Condry 1983）。その評価作業により多様な評価方法が発達し、膨大な研究蓄積がなされた。

低所得家庭の子どもに対する教育的アプローチの効果を求めようとしたプロジェクトは、ヘッドスタートに限られてはいなかった。中でも経年的な研究として最も著名なものとして、カロライナ・アベセダリアン・プロジェクト（1972～）、ペリー・プレスクール・プロジェクト（1962～）、シカゴ経年的研究（1985～）の三つがあげられる。これらは低所得家庭のハイ・リスクをもつ就学前の子どもに質の高い保育を提供することで、成長してからもその効果は継続することを示した（Vandell,D.L & Wolf,B. 2000）。

このように、低所得家庭の子どもに早期から適切な教育とケアを提供することには効果がある、とみなされている。ヘッドスタート・プロジェクトはさまざまな評価を受けつつも今日に至るまで継続している。では、ヘッドスタートの対象となるような低所得家庭ではない、アメリカ社会でこれまで社会政策的な対象とされてこなかった家庭の子どもにとって、母親によらないチャイルドケア、あるいは早期の教育的な関わりはどのような影響

を持つのであろうか。

NICHID・SECCY プロジェクトはこのような疑問を基点として開始された。プロジェクトの実行は、アメリカ社会において就学前の子どもに対する教育的介入あるいはチャイルドケアの提供が、すでにそれぞれ特定の社会階層によって求められ、別々に実行されるものではなくなったという認識が、多くの人々によって共有されていることを示す。

次項でも述べるように、1980 年年代後半から 90 年代にかけて、就学前の子どもが母親以外によってケアされることが例外的なことではなく、標準的なこととなっていった。さらに 1996 年からは「社会福祉から労働福祉へ　welfare to workfare」政策の実行により、男性稼得者のいない家庭で子どもを持つ母親であっても就労が奨励されることになった。チャイルドケアはより低い料金で、かつ子どもの発達を損なわないように提供されることが強く求められるようになった。このような社会的変化と従来の発達研究等の蓄積を背景としてプロジェクトは生まれたといえよう。

NICHD・SECCY プロジェクトにより、どのような家庭環境と個人的特性を持つ子どもが、どのようなチャイルドケアを経験することで、のちのプレスクール（３・４歳時)、キンダーガーデン、小学校入学以降とどのような認知的・社会的・身体的発達をとげてゆくのか、その軌跡が大規模に追及されることになる。

なお、アメリカでの乳幼児の追跡研究として他にも大規模なパネル・コーホート・スタディとして「乳幼児追跡研究　Early Childhood Longitudinal Study(ECLS)」があることを紹介しておかなくてはならない。これは、2001 年生まれの子どものコーホートと（NCEL-B)、1998 年秋にキンダーガーデン等に在籍していた子どものコーホート（NCEL-K）の追跡を行っている。このプロジェクトについては別の機会にとりあげることとし、本稿では指摘に止める。

３．NICHD プロジェクトの概要

（１）経緯

アメリカでは、1986 年までには３歳以下の子どもを持つ既婚の母親の 50%は労働市場に参入していた。そして 1990 年の初めにはほとんど 60%に達していた[4]。このような社会的状況を背景として、母親の雇用とチャイルドケア利用の増大をめぐって、公衆衛生という観点から科学的な論議も湧き上がるに至った。とくに乳児期（０～２歳）のチャイルドケアが子どもの発達にどのような影響をおよぼすかという疑問の解明のために、1987 年、NICHD 所長デュアン・アレクサンダー博士を中心として研究プロジェクトが立ち上げられた。後には乳児期のチャイルドケアがプレ・スクール（３・４歳）以降どのような影響をもたらすかについても研究が拡大されていった。

このプロジェクトは 1991 年生まれの子どもを対象とした、総合的なパネル・コーホート・スタディ（後述）であるが、データの収集は誕生時から生後 36 ヶ月までのフェーズⅠ、生

[4]Kamerman,S.B. & Kahn, A.J. (1995) *Starting Right,* Oxford University Press.

後54ヶ月から第1学年までのフェーズⅡ、第2学年から6学年までのフェーズⅢを終了し（2005年）、現在フェーズⅣでのデータの収集の段階に至っている。

（2）研究の目標と理念

プロジェクトの研究は、当初次のような目標と理念を持ってデザインされた（NICHID, 1992, 2005）。知人によるものから集団保育までその形態を問わず、チャイルドケア経験とは、多様な家族的背景を持つ乳児（0～2歳）の心理学的・身体的発達にどのような影響を与えるのだろうか。この疑問を検証することが研究の目標であった。そのために、家族や家庭、チャイルドケア環境、子ども自身の特性がどのように相互に関係しあい、時間を経ることでどのように推移し、どのように関係性の蓄積が生ずるかを明らかにする研究のデザインが求められた。

そこでブロンフェンブレンナーの生態学的モデルと、エルダーによって例証された（Elder, 1998）ライフコース理論が採用された。ライフコース・アプローチでは、子どもと家族の生活にどんな節目がどのようなタイミングで訪れたかに焦点づけられた。例えば、子どもの入学などは予定が立つものであるが、離婚やチャイルドケアの変更などは予期できぬものであり、そのタイミングは子どもの年齢によっても与える影響は異なる。また、さらに大きな範囲では、景気の動向も家族のライフステージによって与える影響が異なる。ブロンフェンブレンナーは、従来の生態学的モデルに発達の顕現と軌跡を経年的に、かつ歴史的なコンテキストで追跡することの重要性を強調していた。

プロジェクトによって示されたモデルは、母親に拠らないケアの経験、家族環境、子ども自身の特性と個人や家族の属する社会的・文化的・経済的コンテキストを考慮に入れた枠組みである（図1）。

図1

（3）サンプルの抽出

調査対象は9の州から（ヴァージニア州、カリフォルニア州、カンサス州、アリゾナ州、ウィスコンシン州、ノースカロライナ州、ペンシルヴァニア州、ワシントン州、マサチューセッツ州）10の地域が選ばれた。都市部、地方など特徴をもつそれら10の地域にある24の病院から1991年生まれの健康な（満期出産）新生児と母親の組み合わせが選ばれた。あらかじめ8986組の親子が病院で選ばれ、その後調査への協力の確認（電話確認、面接）を経て最終的に1364組が調査の対象となった。それぞれの地域からはおよそ同数の親子が選ばれた。

サンプリングは、(a) 子どもが1歳になる以前にフルタイムで働き始める母親が60%、パートタイムで働く母親が20%、家庭にとどまるつもりの母親が20%となるように、(b) 地域の経済的、学歴、民族的といった人口学的な多様性を反映するように、設計された。ふた親とひとり親家庭の両方が含まれている。最初から除外されたのは (a) 子どもの誕生時に母親が18歳以下、(b) 3年以内に調査地域外に転居が予想される、(c) 子どもが誕生

時に明らかな障害をもつか7日以上の入院をした、（d）母親の英語力が十分でない、以上のケースであった。

（4）データの収集

フェーズⅠからⅢまでのデータは以下の表のスケジュールで行われた。用いられたアセスメントについて、フェーズⅠ～Ⅲで用いられた検査法等一覧を文末に資料として付した。資料が示すように、フェーズⅠだけでも67の検査法等が使用・実行されている。

表1　データ収集のスケジュール（フェーズⅠ～Ⅲ）

	子どもの月齢または学年										
	生後（月）						学年				
実施場所等	1	6	15	24	36	54	1	3	4	5	6
家庭	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
チャイルドケア		○	○	○	○	○					
学校							○	○		○	
実験室			○	○	○	○	○	○	○	○	○
健康/思春期調査									○	○	○
身体活動								○		○	○

出所；http://secc.rti.org/instrument.cfm より作成

3．NICHIDによる研究の展開

（1）母親以外によるケアと家族要因は子どもの早期発達にどのような影響を与えるか

まず生後1年までのチャイルドケアの状況であるが、10の地域からの1281家族を対象として調査された。それによると大多数の乳児（81%）は1歳以前に定期的に母親以外によってケアをされる。生後4か月以前に週に30時間近く預けられるのが最も多数を占め、1歳以前に母親によってだけケアされるのは5人に1人の割合にも満たない。半数近くはまず親戚にあずけられる。チャイルドケアを経験する子どもは、1歳になるまでに平均して2種類以上の親以外によるケアを受ける[5]。結果として、乳児保育の利用率は高く、生後極めて早く開始され、かなり不安定な状態にある（NICHID 1997a）。

ではこのように生後まもなく母親以外によってケアをされることは、子どもの発達にどのような影響を与えるのだろうか。そこで1100人の子どもが0歳から7歳まで追跡され、家族、チャイルドケア/学校生活経験のコンテキストの中で、社会性・情緒発達、認知的発達、身体的健康にどのような成果が現れたかが検証された。生後3年までは母親以外によるチャイルドケアの質により、子どもの社会性・情緒面と認知・言語面での成果は予測さ

5 アメリカの著名な家族政策研究者であるカーンとカマーマンは、これをチャイルドケア・パッケージと呼び、その状況を憂いている。

れる。チャイルドケアの量により、社会・情緒面での成果はある程度予測される。チャイルドケアのタイプとその安定性はあまり予測性をもたない。母親の感受性、家庭内環境の質、所得という家族要因の方が、子どもの親によらないケアのどのような経験よりも、一定して成果を予測することが可能であった（NICHID 2001a）。

（2）チャイルドケアは母子関係に影響を与えるか

母親によらないチャイルドケアは母子関係にどのような影響を与え、その影響は年月の経過とともに変わるのか、変わらないのか。多くの人によって母子関係は子ども期、思春期の心理学的発達の重要な要因であると信じられているのに、近年、子どもの福祉の増進というよりも、経済的・人口学的要因から家族を支えるために女性が就労に赴き、早期からのチャイルドケアが利用されている。母子関係とチャイルドケアの関係はこれまでも多くの論議を呼び続けていた（NICHID 2005）。

1153 人の子どもに対し、生後 1 年までのチャイルドケアの影響についてみていくと、チャイルドケアそれ自体が母子の愛着関係に影響を与えることはない。だが質が低く、不安定で、量的に最小限度以上のチャイルドケアがもともとの母親の養育のまずさと結びつくとリスクを増やす（NICHID 1997b）。

1100～1200 人の子どもに対し生後６、15、24、36 か月時にチャイルドケアの量（時間）と質が母子関係に与える影響についてのデータが集められた。その結果、データ分析の範囲では生後３年まではチャイルドケアの量と質が、何らかの母子関係を明確に予測するまでの際立った違いが発見されるには至らなかった。とはいえ依然、母子がともに過ごす時間が重要であることと質の高いチャイルドケアが、母子関係に良い影響を与えることは僅差ではあるとはいえ、影響がみてとれた。最終的にどのような長期的な影響を及ぼすかについては、子どもの今後の学校生活を追跡していかなくては明らかにはならない（NICHID 1999）。

生後３年までの母親によらないいろいろなチャイルドケア経験の積み重ねは 3 歳から小学 1 年生のあいだにどのような影響が現れるかについても、特定の傾向が明確な差を明らかにするには至っていない（NICHID 2003）。

ウィスコンシン州で 53 組の親子を対象とした研究では、チャイルドケアを利用した際に、母親が保育者などとよいパートナーシップが築かれていると、子どもに対してより支持的・応答的になるという結論が得られている（NICHID 2000）。

（3）チャイルドケアの影響は子どもの心理学的発達にどのような形で現れるか

子どもが経験するチャイルドケアは、質、量、種類とともに多様であるが、それらは経年的にみて、どのように子どもの社会性、情緒、認知的発達に影響を及ぼすのであろうか。

現在のところまでのデータ分析では早期のチャイルドケアは発達的なリスクと利点の両方をもちあわせている。チャイルドケアの量、質、タイプは重要な要因である。質の高い

チャイルドケアが積み重なり、集団保育の経験が多くなると、学業の前段階のスキル、言語の発達に良い影響をもたらす。4歳半以前のチャイルドケアの量が多くなるに連れて4歳半時点での問題行動の量も多くなる（NICHID 2002）。

生後 1 年以内に始まる早期のチャイルドケアの影響は、年齢を追うことで子どもの発達段階とあいまってそのときどきの状況を示す（NICHID 1998, 2001b）。あるいは子どもの生活の変化の節目、つまりキンダーガーデンの入学や小学校の入学時はすべての子どもに共通する成長の節目であり、それまでの生活経験の影響もあらわれやすい。

キンダーガーデン入学時に現れる子どもの問題傾向は、4歳半までのチャイルドケアの量に関わってくる。チャイルドケアのタイプを問わず、質、母親の応答性、家族の状況、どのような条件よりも時間の長さが影響する（NICHID 2003）。

4．まとめと考察

NICIDの早期保育リサーチネットワークによる研究プロジェクトは、ランダムにサンプルを抽出する統計的手法で選ばれた 1,300 組あまりの母子が生後まもなくから、多くの検査法やインタビューによって生育のプロセスを追跡されるという、きわめて大規模なものである。この研究プロジェクトにより、早期からの母親によらない養育、家族の要因、チャイルドケアの状況が、時間的な流れの中でどのように影響しあい子どもの社会性・情緒、認知面、身体の発育にどのような成果をもたらすかが、精緻な科学的手続きを経て検証されている。

現在のところ、つぎのようなことが明らかにされた。質の高いチャイルドケアは子どもによい成果をもたらす。質の高い早期保育の指標は、子どもが属するグループが小さいこと、おとな対子どもの比率が低い（おとな一人当たりの子どもの数が少ない）こと、ケアギヴァーが権威的な養育方針をもたないこと、安全・清潔で子どもの意欲や関心を刺激するような物的環境がある、といったものである。チャイルドケアの質とタイプは、子どもの認知的能力、社会性、情緒面で明らかに影響を与える。チャイルドケアの量や、その安定度はあまり影響がない。だがこれらのチャイルドケアからもたらされる成果は、子どもの家庭内での体験をぬきにして考えることはできない。子どもの家庭内での体験はチャイルドケアの経験に強い影響を与える。家庭内での体験には母親の応答性、家庭内環境、家庭の経済状況が含まれる。母親の応答性についてはチャイルドケアの質とかかわりがある。

ではNICHIDの研究プロジェクトが日本の保育研究に与える示唆とは何か。日本ではこのような大規模プロジェクトの実施を可能にする財源、研究者集団、研究の実施を可能にする調査員やデータ処理を行うリサーチアシスタント、これらのリソースが極めて乏しいという現状がある。背景には、長年にわたって保育サービスが精緻な科学的手続きを必要とする研究対象ではなかったという事情があろう。このことの背景にはわが国における公的保育提供が母親の就労による貧困の防止、および子どもの福祉向上という予防的見地から実施されたという経緯（Michel 1999）が関係しているかもしれない。

科学的手続きは、行われている保育内容についてのアカウンタビリティ（説明責任）と切り離して考えることはできない。アカウンタビリティという概念が導入されたのは、近年の日本における社会福祉基礎構造改革以後のことであり、保育分野においていまだに現場でなじみあるものとはいいにくい。とはいえ、保育の第三者評価事業の実施に伴い、アカウンタビリティの徹底は急務となっている。

このとき評価対象として、保育の構造的な部分、すなわち部屋の面積や保育所の開所時間、職員の配置、など数値で示される「保育の質」は示しやすい。従来ともすればこのような指標を持って外部から「評価」されがちであった。だが実際に保育に携わるものからすれば、保育者と子どものコミュニケーション、子どもが活動意欲を刺激されるような環境設定等、いわく言いがたい部分こそが保育の質を物語るのであり、その表現のしづらさが「評価」に対する違和感、ときには反感をもたらしていたように思われる。

だがこのような当事者から明確に語られることのない「質」は保育関係者以外にとってはブラック・ボックスである。このブラック・ボックスの内容を丁寧に開示し、科学的根拠を持ってその重要性を示すことは保育研究者の責務ではないだろうか。NICHD の研究プロジェクトの規模の大きさに及ぶべくはなくとも、一定の基準を示し共通の視点をもって保育の内容を説明可能なものすることが、その改善の第一歩であり、保育の質向上に大きく貢献することになる。

NICHID の研究がわが国の保育サービスに与える示唆とは、質の高い保育が子どもに良い結果をもたらすことの確信と、家族支援の重要性である。母親の感受性・応答性が子どもに与える影響は大であるが、研究結果から、質の高い保育は母親の感受性・応答性を高めるようなサポートが可能であるという結論を得ている。

他方で、早期で長時間の母親によらない保育が後にもたらす影響については、慎重に取り扱われなくてはいけない研究結果である。さらに長期のスパンでの影響は未だ明らかになっていない。母親の就労の増大という避けがたい現実もある。この点に関しては保育サービスと女性の就労、家族支援を社会政策としてどう位置づけるかという政策的な視点が求められる。アメリカという自由主義福祉国家における母親の就労と保育サービス供給のあり方を、同じくエスピン - アンデルセンの福祉国家類型論で社会民主主義レジームに分類される北欧諸国、保守主義レジームに分類される大陸ヨーロッパ諸国の状況と比較しつつ、わが国の保育サービスの供給と女性の就労、家族支援（男性の就労のあり方を含め）をよりマクロな視点から検討することが課題となろう。

安梅勅江（2005）『子育ち環境と子育て支援－よりよい長時間保育の見分け方』勁草書房
Michel, S. (1999) *Children's Interests/Mothers' Rights: The Shaping of America's*

Child Care Policy. Yale University Press.

NICHID Early Child Care Research Network. (1992). The NICHID Study of Early Child Care: A Comprehensive Longitudinal Study of Young Children' s Lives (ERIC Document Reproduction Service No. ED 353 0870).

NICHID Early Child Care Research Network. (1997a). Child Care in the First Year of Life. *Merrill-Palmer Quarterly*, 43.

NICHID Early Child Care Research Network. (1997b). The Effect of Infant Child Care on Infant-Mother Attachment Security. *Child Development*, 60.

NICHID Early Child Care Research Network. (1998). Early Child Care and Self-Control, Compliance, and Problem Behavior at 24 and 36 Months. *Child Development*, 69.

NICHID Early Child Care Research Network. (2001a). Caregiver-Mother Partnership Behavior and the Quality of Caregiver-Child and Mother-Child Interactions. *Early Childhood Research Quarterly*, 15.

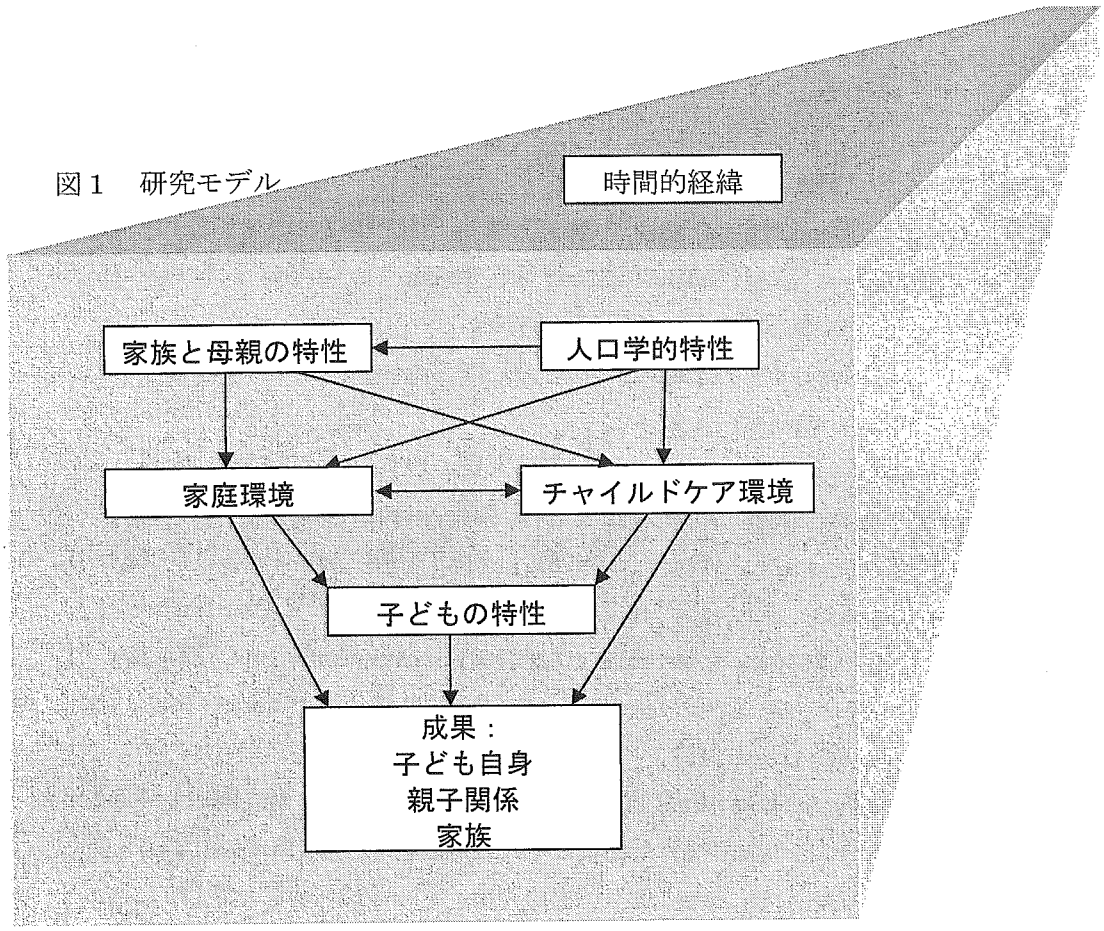
NICHID Early Child Care Research Network. (2001b). Nonmaternal Care and Family Factors in Early Development. Journal of Applied Developmental Psychology, 22.

NICHID Early Child Care Research Network. (2002). Early Child Care and Children' s Development Prior to School Entry. *American Educational Research Journal*, 39.

NICHID Early Child Care Research Network . (2005). *Child Care and Child Development*. Gulford.

NICHID Early Child Care Research Network. (2003). Does amount of Time Spent in Child Care Predict Socioemotional adjustment during the Trantion to Kindergarten?. *Child Development*, 74.

図１　研究モデル


時間的経緯
家族と母親の特性
人口学的特性
家庭環境
チャイルドケア環境
子どもの特性
成果：
子ども自身
親子関係
家族

資料・研究プロジェクトで使用・実施された検査法等一覧

フェーズⅠ

・社会的適応行動検査　Adaptive Social Behavior Inventory(ASBI)
・集団保育評価　Assessment Profile for Early Childhood Programs(APECP)
・家庭的保育評価　Assessment Profile for Family Day Care(APEDC)
・愛着行動Qセット　Attachment Behavior Q-Set
・母親就労に対する態度　Attitude Toward Maternal Employment
・乳児発達検査　Beiley Scales of Infant Development··Revised
・乳児精神発達検査　Beiley Scales of Infant Development (Mental De. Index)
・基本概念検査　Bracken Basic Concept Scales(BBCS)
・抑うつ度検査　Center for Epidemiological Studies Depression Scales(CES-D)
・子ども行動チェックリスト　Child Behavior Checklist(Achenbach CBCL)
・ケアギヴァーインタビュー　Child Caregiver Interview
・(ケアギヴァーによる) 親子分離・再会評価　Child Care Separation/Reunion Scale
・仕事と家庭の両立　Combining Work and Family
・(24/36か月) 片付け実験評価　Compliance Ratings from Lab Clean-Up Procedure
・片付け評価　Compliance Ratings in Growth Procedure
・所 (園) 長への質問紙　Director Questionnaires-Long and Short Versions
・所 (園) 長への電話インタビュー　Director Telephone Interview
・訪問不可であった所 (園) 長への電話インタビュー
・乳児早期の気質についての質問紙　Early Infant Temperament Questionnair(EITQ)
・家庭の経済状況　Family Finances
・身体測定　Growth Measures
・家庭環境観察評価/幼児版
　Home Observation for Measurement of the Environment(HOME) Inventory- Early Childhood version
・家庭的保育環境観察評価/幼児版
　ＨＯＭＥ Inventory for family child care home settings - Early Childhood version
・家庭観環境観察評価/乳児版
　HOME Inventory - Infant/Toddler Version
・家庭的保育環境観察評価/乳児版
　ＨＯＭＥ Inventory for family child care home settings- Infant/Toddler Version
・家庭インタビュー　Home Interview-Booklet 1 and 2
・乳児気質質問紙　Infant Temperament Questionnaire(ITQ)
・インタビュー/パート６/情報更新　Interview Part Six: Updating Files
・職業役割評価　Job Role Quality Scale (Job Experience)
・実験室観察　Lab Monitoring Form
・親密性検査/パートＡ
　Love and Relation ship Part A: Personal Assessment of Intimacy in Relationships(PAIR)
・親密性検査/パートＢ　Love and Relation ship Part B
・コミュニケーション発達検査 (0-２歳用)
　MacArther Communicative Development Inventories(CDI)for Infants and Toddlers
・母子分離不安スケール　Ｍａｔｅｒｎａｌ Separation Anxiety Scales(MSAS)
・母子相互関係—準構造的手法 (6ヶ月家庭訪問時)
　Mother-Child Interaction – Semi-Structured Procedure
・構造的母子相互関係　Mother-Child Interaction –Structured Instruction

・私のチャイルドケア My Child Care
・父親としての時間の過ごし方　Ｍｙ Time Spent as a Parent (Parts 1&2) (Fathers only)
・ＮＥＯ性格検査およびＮＥＯ5 要因検査
　ＮＥＯ　Ｐｅｒｓｏｎａｌ　Ｉｎｖｅｎｔｏｔｙ (NEO PI) and NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI)
・養育環境観察記録/パート１　Ｏｂｓｅｒｖａｔｉｏｎａｌ Record of the Caregiving Environment (ORCE):Part 1: Behavior Scale, Qualitative Scales, and Observed Structural Variables
・母子関係観察記録　Ｏｂｓｅｒｖａｔｉｏ Report - Overall Impression of Mother-Infant Relation ship
・１か月インタビュー　Ｏｎｅ Month Interview
・親役割スケール　Parent Role Quality Scale
・親子関係調整スケール　Ｐａｒｅｎｔａｌ Locus of Control Scale
・子育て観スケール　Ｐａｒｅｎｔａｌ　Ｍｏｄｅｒｎｉｔｙ Scale of Child-rearing and Education Beliefs
・子育てストレス指標　Parental Stress Index (PSI)
・間接喫煙調査　Passive Smoking
・語彙検査　Peabody Picture Vocabulary Test-Revised (PPVT-R)
・仲間観察　Peer Observation Coding Form
・仲間観察ビデオ記録　Peer Observation Videotaping Report
・医療記録　Ｐｈｙｓｉｃｉａｎ Contact Form (Ear Infection)
・訪問後インタビューと養育環境評価　Post Visit Interview and Rating of the Caregiving Environment
・訪問後母子評価　Post Visit Rating of Mother and Child
・他者関係　Ｒｅｌａｔｉｏｎship with Other People
・言語発達検査　Reynell Developmental Language Scale (RDLS)
・自己抑制　Ｓｅｌｆ Control Procedure
・６ヶ月訪問インタビュー　Six-Month Home Interview Section 1&2
・おやつ　Ｓｎａｃｋ Procedure
・ひとり遊び（関心対象）　Ｓｏｌｉｔａｒｙ Play (Coding for Focused Attention During Play)
・ひとり遊び（遊びのレベル）　Solitary Play (Coding for Level of Play)
・置き去り　Ｓｔｒａｎｇｅ　Ｓｉｔｕａｔｉｏｎ
・年下の世話　Taking Care of Young Children
・電話コンタクト（年４回）　Telephone Contact (Quality Updates: Demographic & Health Data)
・電話コンタクト（訪問前）　Telephone Contact (Pre-Visit Child Care Updates)
・時間利用調査　Time Use Interview
・職業観スケール　Work Commitment Scale
・妊娠状況　Your Pregnancy

成績評価
学童保育員インタビュー
学童保育環境評価
出席・推薦・留年情報

カリフォルニア就学前社会的有能性スケール

子ども行動チェックリスト
家庭養育環境